

## V 岩手山山麓部の潜在自然植生

岩手山山麓部をはじめとして、東北地方では、海拔 400m 付近までの低山帯には自然林はほとんど残されていない。現存植生の自然林の残存林分と、代償植生の比較により、Tab. 18 より岩手山山麓部の潜在自然植生が考察された。

岩手山山麓部のような低山地、海拔 400m 以下の地域では岩手県、秋田県をとおり、東北地方一般にコナラ・ミズナラの二次林が広い面積で広がっている。コナラは一般にブナクラス域下部に生育するが、人為的影響により、ヤブツバキクラス域に下降し、さらにブナクラス域では上昇して二次林を形成している。類似した立地における、コナラ林とミズナラ林の高木層における優占種による種組成の相違はみられない。頻繁な人為的影響によっては、ブナ林構成種の復元は困難で、コナラ・ミズナラ林の若合林においては、その標徴種をみるることができない。

岩手山山麓部で行なわれた植生調査資料の比較により、適潤地から乾性立地の自然植生はヒメアオキーブナ群集及びマルバマンサクブナ群集が区分された。代償植生ではオオバクロモジミズナラ群集、アカマツ植林、カラマツ植林、スギ植林が主としてみられる。これらの種組成を比較すると、人為的影響により、コナラ、クリ、サワフタギ、ガマズミ、ムラサキシキブ、アケビ、ハリギリなどの表日本型気候下の夏緑広葉樹林構成種（スズタケブナ群団：ブナ林以外も含む）が生育する。また、自然の多雪地域のブナ林（チシマザサブナ群団）の構成種であるヒメモチ、チシマザサの生育が少ない。生長したコナラミズナラ林（オオバクロモジミズナラ群集）やアカマツ植林中に、ヒメアオキーブナ群集の標徴種及び区分種とされたヒメアオキ、ハイヌガヤ、ゴトウヅルがみられた。チシマザサブナ群団構成種のオオバクロモジ、ハイヌツゲ、ベニイタヤは高常在度で生育する。ササブナオーダー、ブナクラスの標徴種であるミズナラ、オオカメノキ、アオダモ、ハウチワカエデ、ホオノキ、イワガラミが生育している。またササブナオーダー及び二次林を構成するコナラミズナラオーダーの共通種であるヤマウルシ、コマユミ、ウワミズザクラ、ミヤマガマズミ、ツノハシバミ、ツタウルシが広く生育する。これらの共通種をクラスの標徴種として考えられればミズナラブナクラスとして新しく規定されるが、果たしてブナ林とコナラ林が同位置において考えられるかどうか、又別の機会に論じたい。ここではコナラミズナラオーダーを上級単位未決定として別に扱われた。

岩手山山麓部における現存植生及び潜在自然植生の配分モードが Fig. 6 に示されている。さらに広くみるために、東北地方における自然植生配分モードが Fig. 7 に示された。岩手山地域とほぼ同緯度の断面が模式化されている。

主な群落について以下に示される。

### 1. ブナ林

ブナ林は裏日本多雪地の山地にもっとも広く分布する夏緑広葉樹林である。表日本の寡雪地で

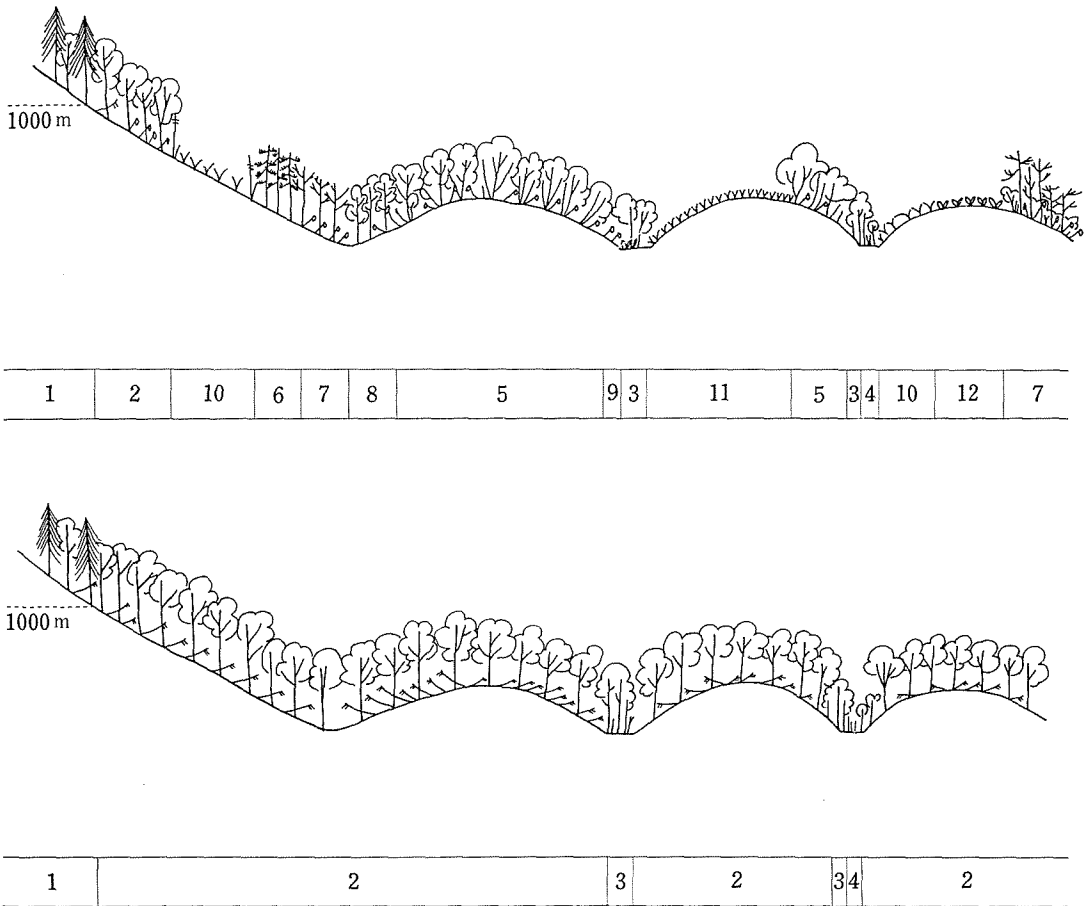


Fig. 6 岩手山山麓部における現存植生(A)および潜在自然植生(B)の配分模式  
Verteilungsschema der realen Vegetation (A) und potentiellen natürlichen  
Vegetation am Fuße des Berges Iwatesan

I 自然植生 Natürliche Vegetation

- |  |  |
|--|--|
| 1. マルバマンサク-ブナ群集<br><i>Hamamelis-Fagetum crenatae</i>   | 2. ヒメアオキ-ブナ群集<br><i>Aucubifagetum crenatae</i> |
| 3. タチアザミ-ハンノキ群集<br><i>Cirsio inundato-Alnetum japonicae</i>  |  |
| 4. ミミカキグサ-ホシクサ群落他 (湿原植物群落)<br><i>Utricularia bifida-Eriocaulon</i> sp.-Gesellschaft u. a. (Moorvegetation) |  |

II 代償植生 Ersatzgesellschaften

- |  |  |
|--|--|
| 5. オオバクロモジ-ミズナラ群集<br><i>Lindera umbellata</i> var. <i>membranacea</i> - <i>Quercus mongolica</i> var. <i>grosseserrata</i> -Ass. |  |
| 6. カラマツ植林<br><i>Larix leptolepis</i> -Forst  | 7. アカマツ植林<br><i>Pinus densiflora</i> -Forst          |
| 8. スギ植林<br><i>Cryptomeria japonica</i> -Forst  | 9. オオバザサ群落<br><i>Sasa megalophylla</i> -Gesellschaft |
| 10. ススキ群落 (スキー場を含む)<br><i>Miscanthus sinensis</i> -Gesellschaft (mit Ski-Platz)  |  |
| 11. カモガヤ群落 (牧草地)<br><i>Dactylis glomerata</i> -Gesellschaft (Wiesen)   |  |
| 12. ナギナタコウジュ-ハチジョウナ群落 (畑地雑草群落)<br><i>Elsholtzia ciliata</i> - <i>Sonchus brachyotis</i> -Ass. (Acker-Unkrautgesellschaft)        |  |

は比較的海拔高度が高い地域においてみられる。現在ブナ林は、ブナ材の利用価値が低いということにより東北地方では奥羽山地に局部的に残されているだけで、低山地ではその大部分が伐採されスギ・ヒノキ植林が行なわれている。また薪炭林としての利用によりコナラ、ミズナラ林におきかわり二次林が低山地に広がっている。

今回の調査結果より岩手山山麓部にはヒメアオキーブナ群集及びマルバマンサクーブナ群集が分布することが、岩手山及び仙岩峠のブナ残存林の調査により理解された。海拔 600m 以上に残されている（単木的には 450m までみられる）ブナ林は、乾性立地やあるいは 1,000m 以上の高海拔地ではマルバマンサクーブナ群集が、海拔 1,000m 以下あるいは適湿土壌地ではヒメアオキーブナ群集が生育する。

ブナ林についての研究では佐々木好之 1972 による日本のブナ林の研究が発表されている (Sasaki, Y. 1972) が当時の群落分類として地理的分布に重点がおかれ、裏日本型気候下にある多雪地域はオオバクロモジブナ群集にまとめられていた。宮脇・大場他の越後三山・奥只見周辺の植生研究 (1968) で発表されているブナ林については比較が行なわれていない。したがって今回ブナ林の植物社会学的位置を知るため多雪地のブナ林 (チシマザサーブナ群団) の総合常在度表がまとめられ (Tab. 17) 再検討された。その結果立地の相違によって種組成の結びつきが強く表現され、ヒメアオキーブナ群集及びマルバマンサクーブナ群集が確認された。

#### 1) ヒメアオキーブナ群集

ヒメアオキーブナ群集はヒメアオキ、ハイイヌガヤ、クマイザサ (あるいはチマキザサ: 葉離の毛の有無が分類の基準にされるが生態的住みわけがないので同位におかれた) を標徴種として広域的にまとめられる。これらの種は時にマルバマンサクーブナ群集に出現する。しかしヒメアオキーブナ群集はかつて鈴木時夫 1954, 1956 によりチシマザサーブナ群集と呼ばれていた多雪地のブナ林の典型部分にあたる。したがって、後に宮脇・大場・村瀬 1964 によりチシマザサーブナ群団にあげられたが範型群集 (鈴木時夫 1976) にあたると考えられる。チシマザサーブナ群集 (鈴木時夫 1954) とヒメアオキーブナ群集 (宮脇他 1968) が同位群集であるならチシマザサーブナ群集の名を使うことが必要とされるが、範型群集を残すか否か今後の課題としたい。ヒメアオキーブナ群集が新群集とされた時点では 2 群集以上の植生単位がみとめられるということで新群集定義が行なわれたため新名称が与えられた。したがって後に佐々木好之 1972 によりまとめられたオオバクロモジブナ群集は三段峡など西中国地方で決められた表日本型気候の影響を受けたクロモジブナ群集に対応してつけられたと考えられる。クロモジブナ群集は広い意味ではマルバマンサクーブナ群集の下位単位、あるいは地域群集になる可能性があるが、さらに組成表比較により再検討が望まれる。

#### 2) マルバマンサクーブナ群集

マルバマンサクーブナ群集は広域的にマルバマンサク、ホツツジ、イワウチワ、リュウブを標徴種及び区分種としてまとめられる。秋田県、富山県立山などに広く分布するスギ林はマルバマ

ンサクーブナ群集スギ亜群集として区分された。マルバマンサクーブナ群集は前述の越後三山・奥只見において、風衝地の丈の低いブナ林について命名された。その後の調査で標徴種及び区分種が発表されるごとに変化がみられたが、今回の比較により、マルバマンサク、ホツツジ、イワウチワ、リュウブが比較的恒定的に生育しヒメアオキブナ群集として区分された。地域的には多くの区分種が両群集の比較においてみられるが、ここにあげられた種群は広域的な標徴種の目安となる。

### 3) オオシラビソブナ群落

海拔高度が高い地域では高木層にブナが優占するが、構成種にツバメオモト、オオシラビソ、ハリブキ、ゴヨウイチゴなどの亜高山性針葉樹林の構成種をもつ植分が区分された。青森県・秋田県の八幡平や富山県でみられる。

## 2. 湿 生 林

湿性林は無機土壤上に発達する林分と、泥炭状土壤上に生育する林分に大きく区分される。前者はトチノキ、サワグルミ林やヤナギ林で、やや後者に近いハルニレ林も含まれる。後者はハンノキ林があげられる。

### 1) ジュウモンジシダーサワグルミ群集

サカゲイノデ、リュウメンシダ、ミヤマベニシダ、(クサソテツ)、エゾアジサイを標徴種に、ハイイヌガヤ、スマレサイシン、オオバクロモジを区分種としてジュウモンジシダーサワグルミ群集がまとめられている(鈴木(時)、結城、金山1956、佐々木、宮脇1976)。

ジュウモンジシダーサワグルミ群集は、沢ぞいの風陰地の排水のよい立地に、林床に大型羊歯類が豊富な林分を形成する。扇状地や崖錐状扇状地などで雪崩が多い地域ではトチノキが下曲してみられる。ハルニレ群集は立地が平坦な沖積地土に主に発達するのにくらべ山の斜面にそった谷ぞいの岩礫の多い立地に生育しやすい。岩手山山麓部ではハルニレ群集とともに植生調査資料が得られなかった。

### 2) ハルニレ群集

河水によって無機土壤が厚く堆積し、地下水位は高いが富養化した立地にハルニレ群集が発達する。ハルニレ、オオタチツボスミレ、カラフトダイコンソウ、オニシモツケ、ハンゴンソウ、オオウバユリを標徴種および区分種としてまとめられる。ハルニレ群集は増水時に冠水し、枯死した草本植物が堆積するため富養化し、さらにまた大型草本植物が生育しやすい環境を形成する。

### 3) タチアザミーハンノキ群集

ハンノキ林は林床にヨシクラスにまとめられる大型スゲ類が生育している植分と、大型草本植物や小型スゲ類が生育する植分がみられる。前者はヨシクラスの植物群落と同位に扱われ、後者はヤチダモが生育することやブナ林構成種が時にみられることよりハルニレ林と同位の植物群落

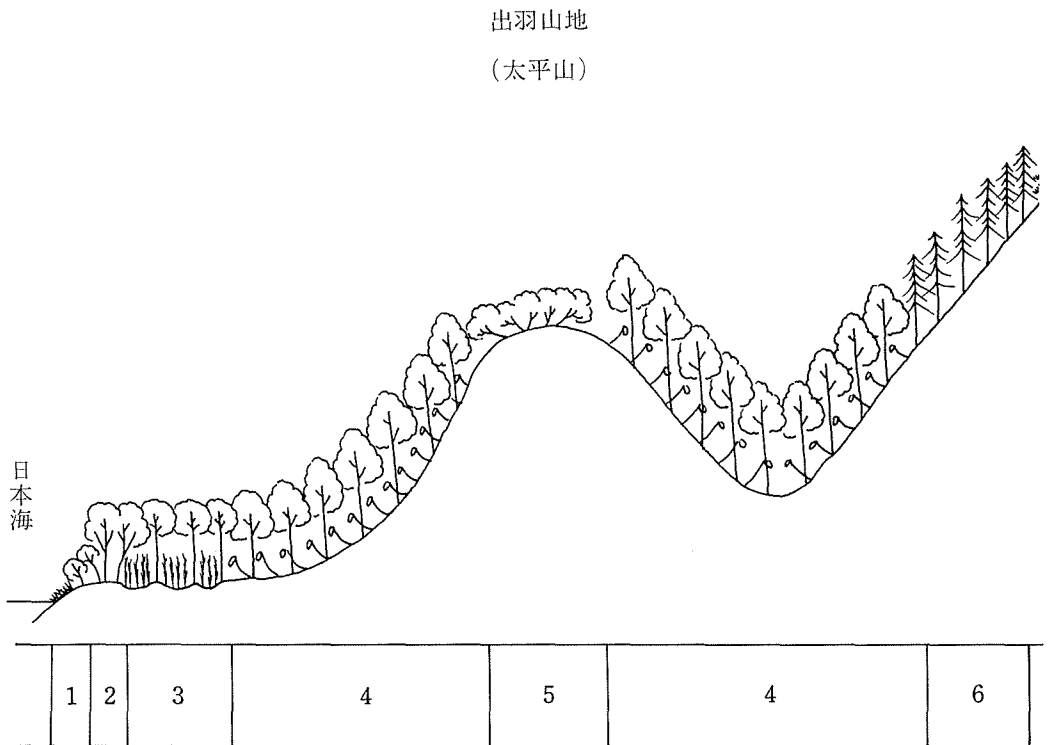
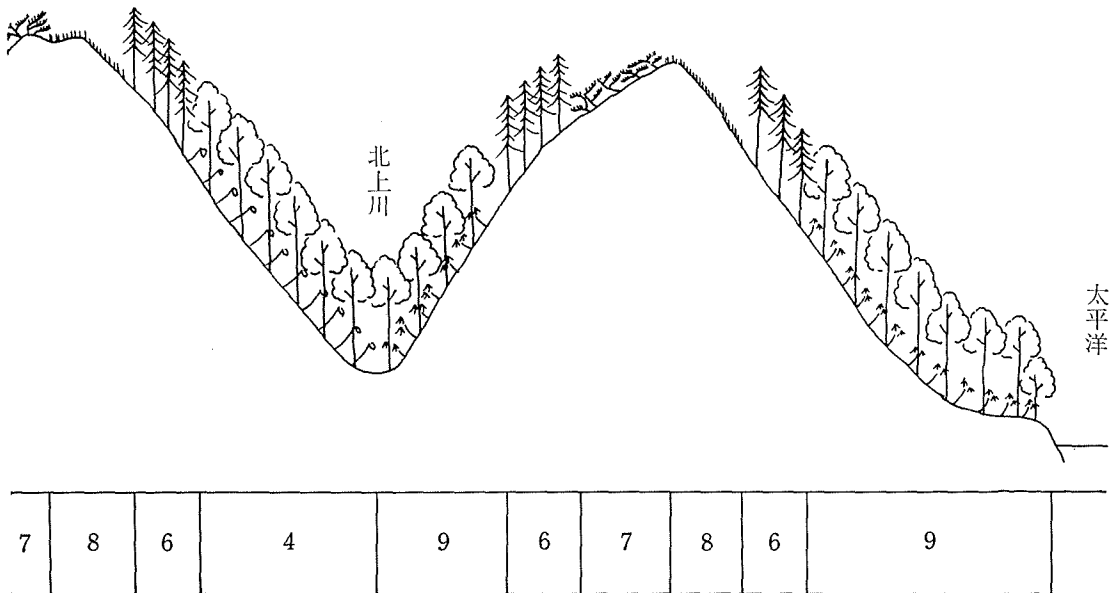


Fig. 7 東北地方における自然植生配分模式  
Vegetationsschema von Nord-Honshu

1. 砂丘植生 (コウボウムギ群団, ハマナス群団)  
Dünen-Vegetation (Caricion kobomugi, Rosion rugosae)
2. イタヤカエデ-シナノキ群落  
*Acer mono-Tilia japonica*-Gesellschaft
3. タチアザミ-ハンノキ群落或はヨシ群落  
*Circao inundato-Alnetum japonicae* oder *Phragmites communis*-Gesellschaft
4. チシマザサ-ブナ群団 (ヒメアオキ-ブナ群集, マルバマンサク-ブナ群集)  
*Saso-Fagion crenatae* (*Aucubo-Fagetum crenatae*, *Hamamelo-Fagetum crenatae*)
5. ウラジロヨウラク-ミヤマナラ群団 (ミヤマナラ群集, ナナカマド-ミネカエデ群落他)  
Menziesio-Quercion  
(*Nanoquercetum*, *Sorbus ccmixta-Acer tschonoshkii*-Gesellschaft u. a.)

奥羽山地  
(岩手山)

北上山地  
(早池峯山)



6. シラビソートウヒ群団 (オオシラビソ群集, コメツガ群落他)  
Abieto-Piceion (*Abietum mariesii*, *Tsuga diversifolia*-Gesellschaft u. a.)
7. コケモモハイマツ群団  
Vaccinio-Pinion pumilae
8. 高山草原植物群落  
Alpine-Wiesen-Gesellschaften
9. スズタケブナ群団 (イヌブナブナ群集他)  
Sasamorpha-Fagion crenatae  
(*Fagus japonica*-*Fagus crenata*-Ass. u. a.)

にみられていた。岩手山山麓部では比較的ハンノキ林が多く残されていたため、今回ハンノキ林の種組成の比較が行なわれた。ハンノキ林については長野県戸隠（羽田・和田・平林・中山1972）、新潟県小千谷市（相沢・瀬沼 1976）、下北半島（宮脇未発表資料）が東北、中部地方より、関東地方では茨城県、千葉県（鈴木由吉）他が発表されている。

今回は多雪地のハンノキ林を比較した結果岩手山山麓部ではヒメシダ、ヒメシロネ、タチアザミ、ヤマドリゼンマイ、グレースゲ、ゴウソ、ハイイヌツゲを区分種としてタチアザミーハンノキ群集が区分された。さらにイソノキ、レンゲツツジ、ヤチダモ、クロウメモドキ、ズミ、カンボク、トネリコ、ミズバショウを標徴種及び区分種としてヤチダモーハンノキ群団が、ハンノキ、サクラソウ、ミゾソバ、マツバスケ、ツボスミレを標徴種及び区分種としてハンノキクラスが規定されなおされた。

ハンノキ林については鈴木時夫らにより九州九重高原でハンノキクラスが提唱されているが所属する群集、群団、オーダーはヨシクラスに所属する。したがって、ハンノキクラスの性格が異なる。ハンノキクラスは構成種にヨシクラス構成種を多くもつが、林内の温湿度合によるもので、これはヤブツバキクラスにおけるコナラ林の林床がスキ草原の構成種が多いのと同様で（コナラ林の場合は人為的影響によるが）、他の森林に対する区分種としては使えるが標徴種とは質が異なるものである。したがって、ここでは新しく、体系化が再編成された。

日本のハンノキ林はヤブツバキクラス域のハンノキ林と、ブナクラス域のハンノキ林の構成種の共通種が少ない。群団あるいはオーダーの単位で異なると考えられるがさらに比較検討が必要とされる。